

幼児の情緒的発達の場としての幼稚園



宮 本 美 沙 子

幼稚園にかようなようになった幼児が、まず第一に求めていることは、自分の立場の安全性ということであろう。友だちと遊びたい興味も、あるいは珍しい玩具にさわったり何かをおぼえたい好奇心も、安心感にささえられない限り、十分満足をもった経験としては体得されえない。

一九五六年に出版された、ムスターカスとバーソン (C.E. Moustakas, M.P. Berson) 著「幼稚園児」(注一)の第四章に、幼稚園児の情緒の問題がとりあげられている。その中で、ムスターカスらは、次にあげるようないくつかの研究結果を引用している。多少古い研究ではあるが、はじめにそれを紹介しながら、幼児の情緒的発達の問題をみていきたい。

幼稚園入園後、一般的にいうと、幼児の情緒は日がたつにつ

れて安定してくるものである。ハトウィック (L. W. Hartwick) (注二)によれば、幼児の神経質的な傾向、たとえば髪の毛をねじったり、坐っている間にもじもじ動いたり、固くなって緊張したりするような行動は、日がたつにつれて減少しているという。アンドラスとホロウィッツ (R. Andrus, E. L. Horowitz) (注三)も、それに似た結果を示している。それによると、先

生から指示されたり注意されたりしたことに對し、はじめの頃過敏に應じていた幼児も、日がたつにつれて過敏さが減ることを報告している。と同時に、先生が無理に押しつけようとするような権威に對しては、幼児の反抗的な態度は日がたつにつれて増してくることを見出している。ジャーシールドとマーキー (A. T. Jersild, F. V. Markey) (注四)の研究によると、幼児の攻

撃的行動は、先生の人数の少ないクラスでおこりやすいことや、日がたつにつれて幼児のけんかがふえている結果を報告している。以上の二、三の報告は、幼児の情緒が幼稚園在園という経験によりどう変化したか、という実態の報告である。これらの研究のうち、一方では、幼児は在園して日がたつにつれ、情緒的に安定し不安が減っているという結果が示され、他方では、権威的な先生に対する反抗が増加し、怒りやけんかがより頻発したという結果が示されている。前者の減少と後者の増加とは、一見相反する結果のようではあるが、ある意味では同じ要因の働いていることがうかがえる。即ち、不安が強すぎれば、場面からの後退あるいは逃避がみられるのに対し、自分の立場がわかり安定してくると、自己を主張しようとする意志が出て、適度な攻撃性を表明する勇氣がでる、ということがいえる。更に社会性の発達と関連して、交友関係のひろがりから、けんかや怒りの発生もより頻繁になることとはうなずける。

少しがたった研究では、ドーキーとエイメン(M. Dorkey, E. W. Amen) (注五) による投影法を使った幼児の不安の研究がある。これは、お母さんが赤ちゃんとしょにいるところ、玩具で遊んでいるところ、子ども同士で遊んでいるところ、食事をしているところ、などの一四枚の絵を使用したものだが、そ

の結果、多くの子どもが不安を感じている場面として、「子ども同士の関係」が最も多かった。しかしその不安は月日とともに減少している、という結果が示された。ムスターカスは、この投影法使用について、子どもの側からみた子ども自身の認知する世界の投影という意味で、大人の側からみた行動観察法では得られない利点がある、と述べている。しかしムスターカスの紹介がその詳細を欠いている点と、幼児への投影法施行の限界という点などを考えあわせると、この研究の結果には疑問も残される。

幼稚園で、幼児が失敗に直面した時にどんな行動がみられるかを、カイスター(M. Kisse) (注六) が分析している。それによると、幼児の失敗場面での行動として、(一)問題解決をしようとする態度をはっきり示さない、(二)独りで問題を解決しようとする、(三)他人に解決法をたずねる、(四)助けを求める、(五)破壊的な行動を示す、(六)理窟をつける、(七)問題に興味を示す、(八)特にかわった情緒的表示をしない、(九)無関心、(十)にこにこする、(十一)笑う、(十二)ふくれてすねる、(十三)泣く、(十四)はなをならしてぐちをいう、(十五)わめく、(十六)怒る、といった態度がみられた。

これらの行動のうち、望ましくないとと思われるものは、(一)問題でできるかできないかためさないですぐにやめてしまう、(二)

繰返し何べんも助けを求める、(三)困難な問題に関連のある物や人を傷つけたり破壊しようとする、(四)理窟をつける、(五)おおよきな情緒反応をする、などの行動であるとしている。

カイスターは、これらの場面で情緒的に未熟な態度を示した子どもたちを、教育することにした。はじめやさしい課題からだんだん難かしい問題を与えるようにし、そういう場面に先生が直接関係するようにしていった。(ただしムスターカスの紹介では先生の介入の程度は不明)その結果、先生が手助けをする時、子どもは問題解決の際もつと時間を費やしたし、もつと興味を示すようになった。だんだん子どもはすねたり泣いたりしなくなり、独りでやってみるようになった。破壊的行動、ぐち、わめき、理窟をいう、暴力をふるって怒る、などの行動も減少した。この場合、幼児の年令や在園年月の長さ、というものは、このような失敗場面での子どもの情緒的発達に、あまり重要な要因とはなっていない、というのがカイスターの結論である。この研究では、前に述べた他のいくつかの研究とちがって幼児の情緒的発達に影響を及ぼす要因として、ただ在園期間といった単純な尺度だけでなく、先生の助力という度数をあげていることがわかる。つまり幼稚園という経験そのものに要因を帰せずに、情緒的発達に先生の役割の影響を考え、子どもが

質的にちがった経験をしていることを指摘している。先生の助力の仕方について、子どもをどう理解し、どういう接し方をするか、という相互関係の質のちがいについては、今後なお究明を要する。

幼稚園の先生のとるべき態度について、ランドレスとリード(C. Landreth, K. Read)(注七)はいくつかの見解を述べている。子どもの攻撃性、怒り、けんかなどは、子どもの抑制の発達の指標なのであって、先生がうまく指導できなかったからだと思わないように、といており、幼児に不要なフラストレーションをおこさないように、先生は公平な態度で接することを主張している。先生のとるべき態度として、(一)先生は、子どもの情緒的反応に誠意をもって接し、子どもに関することに何でも興味を示すべきである、(二)先生は、子どもの気持ちの浮き沈みに対していつも同情的立場にたち、一貫して支持と助力を与えるべきである、(三)先生は、子どもが成功できるような経験を計画してやり、子どもの自信を育てるようにする、(四)先生は、子どもが情緒的に動揺している場面で、建設的に応じられるように助力する、の四点をあげている。以上の態度のほか、リードは別の書(注八)で、更にいくつかの指針を指摘している。すなわち、(一)子どもの感情は非難されずに認められなければ

ならない、(二)子どもに、感情を抑えないで公然と表明するよう
にすすめてやる、(三)先生は、受容している気持ちを子どもに言
葉で伝えてやり、より健全な情緒をもつためにはどうしたらよ
いかを行為で示すべきである、と述べている。

最近では、幼児の情緒の調整に、ドル・ブレイやブレイ・セ
ラビーが利用されるようになってきている。これらの方法が幼児の
情緒調整に役にたつことは、古くはフロイドをはじめとして、そ
の意義を認めているところである。その後レビー (D. M. Levy)
(注九) が解放療法を唱えて以来、子どもの抑圧された感情の
解放として、ドル・ブレイの価値が高く評価されるようになって
来り、多くの実験的な研究も行なわれるようになった。ドル・ブ
レイについてのくわしい文献的研究は、依田新・ほか(注
一〇)により発表されているので、それを参照されたい。その
文献内に含まれなかったもので幼稚園児に関するものだけを、
ここでは二、三とりあげよう。

一九四二年にチッテンデン (G. E. Chittenden) の行なった研
究によると、幼稚園児に、人形を使って、けんかや社会的な問
題に関して遊ばせたところ、幼児の支配的行動(攻撃的行動を
含む)が、抑えられたかたちではなく減少した、という事実を
報告している。また、アッペル (M. H. Appel) は、先生が幼稚

園児のけんかをうまく取扱っている場合に、そのやり方をみて
みると、幼児が遊びの中で表現している願いや感情を、先生が
よく理解して説明してやっていた場合であった、と述べてい
る。(注一一)

前述のムスターカスは、別の研究(注一二)で、幼稚園で情
緒的問題のみられる幼児が遊戯療法中に示す情緒的反応と、
正常児の遊びの場面における情緒的反応とのちがいを報告して
いる。それによると、情緒的に問題のある子どもたちは、漠然
とした敵意、家族や家庭に対する敵意、清潔に対する不安、秩
序整頓に対する不安、退行性、などが正常児よりも多くみられ
ている。正常児の場合には、兄弟姉妹に対する敵意がより多く
表現されていたが、その度合はそれほど強いものではなかつ
た。また、一般的にいうと、正常児の敵意的な感情は、対象が
特定ではっきりしているのに対して、情緒的に問題のある幼児
の敵意は、漠然と広がっていて焦点のなかったことを指摘して
いる。

以上いくつかの文献紹介をしながら、幼稚園児の情緒の状態
を概観してきた。いうまでもなく幼児は、幼稚園入園とともに
に、家庭生活とはちがった多くの場面に適応しなければならな
い。子どもに限らず大人でも、新しい場面に適応する時には、

ある程度の自信を必要とする。自信は、今までの発達や経験の程度によって規定される面もあるが、その場面での受けいれられ方によってかなり左右されてくる。リードの述べるように、先生は子どもの感情を非難しないで受けいれ、感情を抑えさせるよりは公然と表明させていく。けんかや怒りのふさがることは、不安をもって回避している状態よりは前進といえる。ただその次元にとどまらずに、次に、不要なあるいは無益な感情を抑え、限度を越えない感情的表現ができるように、指導してやらなければならない。そして更に、それぞれの子どものもっている建設的な感情を育て、ひきたててやる役割が、先生に課せられているわけである。

依田新も述べているように、単に情動の抑制ということだけでなく、健全な情動生活というものも考慮すべきである。つまり、ただ情動的反応をしないというだけでは、感情的にいじけた無感動な人が育つばかりである。情緒の発達ということの中には、豊かな感情生活を楽しむ能力も含められなければならない。(注一三)

- 注一—Moustakas, C. E. & Berson, M. P.: *The Young Child in School*, William Morrow, 1956, ch. 4 93-120.
 注二—Hartwick, L. W.: "The Young Child Needs Companionship", *Parents Mag.*, 1941, 16: 24-25.
 注三—Andrus, R. & Horowitz, E. L.: "The Effect of Nur-

tery School Training: Insecurity Feelings", *Child Development*, 1938, 9: 169-174.

注四—Jersild, A. T. & Markey, F. V.: *Conflicts Between Preschool Children*, Bureau of Publications, Teachers College, Columbia Univ., 1935.

注五—Dorkey, M. & Amen, E. W.: "A Continuation Study of Anxiety of Reactions in Young Children by Means of a Projective Technique", *Genet. Psychol. Monogr.*, 1947, 35: 141-183.

注六—Keister, M.: "The Behavior of Young Children in Failure: An Experimental Attempt to Discover and Modify Undesirable Responses of Preschool Children to Failure", *Studies in Preschool Education*, Univ. of Iowa Studies in Child Welfare, 1937, vol. 14.

注七—Landeth, C. & Read, K. H.: *Education of the Young Child*, John Wiley, 1942.

注八—Read, K. H.: *The Nursery School*, Saunders, 1950.

注九—Levy, D. M.: "Release Therapy", *Am. J. Orthopsychiat.*, 1939, 9.

注一〇—依田新・ほか「Doll Play Techniqueに関する文献的研究」教心研、一九五九、七、四五—六〇。

注一一—Jersild, A. T.: "Emotional Development" in Carmichael, L. ed. *Manual of Child Psychology*, 1954, ch. 14, p. 839.

注一二—Moustakas, C. E.: "The Frequency and Intensity of Negative Attitudes Expressed in Play Therapy: A Comparison of Well Adjusted and Disturbed Young Children", *J. Genet. Psychol.*, 1955, 86: 309-325.

注一三—依田新、教育心理学入門、有斐閣、一九六〇、九九頁。追注—注二一八および注二二の文献は、注一の書に引用されているものである。

なお文献中の英語「ナースリースクール」は、本文中ではすべて幼稚園とした。アメリカでは、厳密には、ナースリースクール(保育学校)には二・三・四才児が、かよい。五才児はキンダーガーデン(幼稚園)にかよふのである。(日本女子大学)